

公募していた市民編集委員に次の五人が選任されました。第三代目となる皆さんは今月から二年間にわたって、この「みんなで作る市民編集のページ」を担当します。今月四日、市役所で開催された第一回編集会議では、それぞれが応募動機を語り合いながら、今後の編集方針や記事の企画などについて、みんなで話し合いました。この日は、市民編集委員五人の問題意識や紙面作りへの意気込み、抱負などについて紹介します。

問い合わせは市政発信課 ☎ 890-6642 へ。

# 5人が決まる 抱負など紹介します

## ゴミ問題の情報や啓発を

石原 弥一 (大胡町・75歳)

大胡・宮城・粕川地区では四月からゴミの出し方が変わりましたが、ゴミ問題は今後とも大きな悩みの種になることでしょう。ゴミがあふれている集積所がある一方で、まだ余裕のある集積所も見受けられます。地域割りを見直す必要があるのではないのでしょうか。また、ほかの地域に住んでいるにもかかわらず、集積所へゴミを持ち込む人もいます。番付きをしたこともあ

りますが、いなくなれば、また、元どおりになってしまおうといった状況でした。市民の意識のあり方が大きく左右するので、「ごみカレンダー」をわたしたちもきちんと確認し、間違いなくゴミを排出しなくてはなりません。しっかりと分別するように意識

## 防犯防災や環境問題など

大沢 幸恵 (朝日町四丁目・36歳)

二期目の市民編集委員となります。これまで二年間の活動を通し、大変貴重な経験をするとともに市政を身近に感じる機会になりました。さて、最近、小中学生の親の間で話題になっていることが二つあります。一つ目は防犯防災です。防

犯に関しては全国でいまだに事件が絶えません。広報でも各地域の状況を紹介しましたが、パトロールの危険性や始

め方についてさらに情報が必要な時期にきていると感じています。また、防災システムに関しても、地域の実情に合ったものかどうか不安です。二つ目は環境問題です。生活排水を垂れ流している家庭が多く、身近な川も夏には異臭を放ち透明度も悪化。下水道・農業集落排水・浄化槽の役割や必要性、現状についてもっと広く家庭へ知らせなくてはいけないと思います。



二つ目は「市役所職員のサ

# 意気込みや

## 市政の理解深めるために

古田島 俊憲 (青柳町・40歳)

日ごろ市政について思っていることが二つあります。

まず、一つ目は「中心市街地の活性化」に対する、市としてのさまざまな取り組みです。にぎわい課の設置など、以前のように活気ある市街地にしたいという姿勢が見られるようになりました。



「ピス向上」への取り組みです。行政書士の仕事をしているので、市役所へはよく行きませんが、窓口の職員の対応が格段に親切になったと思います。市民を見下したような対応の職員はほとんどいなくなりました。しかし、担当が違うからと言って、各部署をたらい回しにする行為は、改善すべきです。こうした二点を含め、市民

一昨年、昨年度に引き続き、今後二年間、再び市民編集をすることになりました。人は何かを求めて集まり、見たり聞いたりしたいもの。そこで確かなものを見つければ、誰かに伝えたいと思うでしょう。こうしたやりとりができる情報発信の場があれば、人が集まり、にぎわうはず。中心市街地がそのような場となる姿を見たいものです。市民が活動していること、計画していること、一つ一つは小さくても表現方法によっ



ては、渦となり波となって広がるでしょう。まずは確実に人に伝えることが大切です。不確かな情報があふれる社会の中でしっかりと情報をつかみ、市民みんなが協力し合っってまちづくりを進めていかななくてはならないのです。市民編集の紙面で、何かお手伝いできればと思っています。

# 新しい市民編集委員



編集会議で意見を出し合い記事の企画を

## それぞれの地域性生かし

諸岡 頼子 (西善町・49歳)

夫の母親の介護に追われる毎日。ある日、気分転換にと中心市街地へ出掛けて、まちの静けさと活気のなさに驚きました。以前のにぎやかさはどこへ行ってしまったのか。高木市長が掲げる「元気で活気にあふれた前橋づくり」の必要性を強く感じます。こ



思うのは、昔の姿を知るわたしたちの世代だけではないでしょう。もっと若者が興味や関心を

持てるような、活気と魅力あふれる都市づくりを望んでいます。合併して人口三十二万人になった前橋市。それぞれの地域の情報や意見といった地域性を生かしていくことが市政の役目です。そして、それを生かすことが「生命都市いきいき前橋」につながるのだと思います。わたしも市民編集委員の一人として、未来ある前橋づくりに参加していきたいと考えています。



市民の立場で取材した紙面